

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284054

研究課題名(和文) アメリカン・ルネサンス文学における情動と身体—アフェクト理論とその応用

研究課題名(英文) The Body and Emotions in American Renaissance: Application of Affect Theory to Literary Texts

研究代表者

竹内 勝徳 (TAKEUCHI, Katsunori)

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：40253918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：アフェクト理論を応用することで、文学テキストにおける身体の働きや情動の諸相を読み取り、アメリカン・ルネサンス期における精神と身体の特徴的な関係を解明した。研究成果としては17本の研究論文、43件の研究発表・シンポジウム、9件の図書刊行を数える。また、毎年、ゲスト講師を迎えてサマーセミナーを開催した。本研究の集大成として平成28年3月に『身体と情動—アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』を刊行した。

研究成果の概要(英文)：We have implemented this research project based on Affect Theory, and succeeded in explicating the significant relations between spiritual aspects and workings of body and emotions in literary texts of American Renaissance. As the research results, we published 17 research papers, gave 43 research presentation, and published 9 books in total. We annually held Summer Seminar inviting guest speakers from Kanto and Kansai areas. The chief output is the book, "The Body and Emotions: Theorizing Affects in American Renaissance," published in March 2016.

研究分野：アメリカ文学

 キーワード：アメリカン・ルネサンス ラルフ・ウォルド・エマソン エドガー・アラン・ポー ハーマン・メルヴ
 イル マーガレット・フロー ナサニエル・ホーソーン ウォルト・ホイットマン アフェクト理論

1. 研究開始当初の背景

F・O・マシセンの『アメリカン・ルネサンス』(1941)は様々な形で検証され、現代に繋がる批評の潮流を形成してきた。我々は、この古典的批評が、労働や経験則に内在するリズムや運動性を一つの物語へと融合していく作家たちの創作に着眼し、それをして彼らの民主主義的側面として評価したことを忘れるべきではないだろう。これは一言で言えば、身体(リズムと運動)と精神(物語)の芸術的融合への評価であった。その後、アメリカン・ルネサンス批評は、新批評や構造主義、ポストモダン批評、新歴史主義、ポストコロニアリズムへと移行していく中で、身体性や経験則よりは時代の政治性や文脈に重点を置くようになった。

もちろん、この間、注目すべき論考も現れている。シャロン・キャメロンの『身体的な自己』(1981)は、メルヴィルやホーソーンの登場人物の身体とその複雑な表象性について論じた。デイヴィッド・レノルズの『アメリカン・ルネサンスの裏側』(1988)と『ホイットマンのアメリカ』(1995)は、感傷小説や対話的オラトリーなどオーディエンスの情動や身体感覚を刺激する大衆文化のあり方を探求した。ポール・ジャイルズは、『大西洋を横断する反乱』(2001)において、18世紀末のコネティカット・ウィッツにおける精神化されない身体を用いたパロディ表現と、19世紀ロマンティシズムの精神主義を対比した。また、サラ・ワイルダーは「クラドニ・パターン、ライシーアム、そして熟練した実験者」(2006)において、エルンスト・クラドニの音響理論を援用して、エマソンの講演技術を分析している。こうした散発的なアプローチを、アメリカン・ルネサンスの文脈とは離れて一気に集約したのが、ジェーン・スレイルキルの『アフエクティング・フィクション』(2007)とイブ・コゾフスキー・セジウィックの『触感』(2003)であった。

2. 研究の目的

本研究は、アフエクト理論を、身体を中心としたネットワーク理論として再構築することで、作家たちが身体反応や情動をどう描き、それをどのように創作に生かしたのかを包括的、立体的に捉えていった。具体的には、以下の目的を達成した。(1) 博物学や身体医学、解剖技術などの科学分野の発展、そこから発想されたパーナムら興行主による人体実験の見せ物や蟻人形などの大衆文化の隆盛、音楽文化の浸透、交通網の発展とそれによってもたらされた異人種の身体との出会いなどを重要な文脈として調査する。併せて、身体感覚と自然科学、資本主義システム、大衆文化、産業文明が互いを織り込む形で有機的に交わるネットワーク構造を新たなアフエクトとして理論化する。(2) 上記の目的の達成を踏まえたうえで、アメリカン・ルネサンス作品から、アフエクト的身体運動や

情動の描写を抽出し、それと時代の文脈との関連を探る。(3) 作家たちのテキスト構造そのものが読者に対してアフエクト的效果を創出していることを立証する。

3. 研究の方法

本研究では、上記の目的を達成するための主な着眼点を(1)アフエクト理論の再構築、(2)各作品においてアフエクト的身体運動や情動の描写を読み取る、(3)アフエクト的效果を創出するテキスト構造を分析と定めた。また、これらの目的を達成するための方法として、(A)文献調査、(B)実地調査、(C)テーマ研究、(D)コンテキスト研究、の4つのアプローチを取った。研究対象となるアメリカン・ルネサンス作家は、エマソン、ソロ、ホーソン、メルヴィル、ポー、ホイットマンである。併せて、ストーリーやディレイニーらも取り扱った。

4. 研究成果

平成25年8月に夏季セミナーを開催し、関東や関西からアメリカ文学研究者の精鋭を招聘して、本研究の核となる概念であるアフエクト理論について、専門書を課題図書として選定し、メンバーそれぞれが研究発表を行うとともに、リディア・マリア・チャイルドやヘンリー・ジェームズなど、メンバーの研究分野に入りきらない作家の情動表現についての講演を聞き、意見交換を行った。アフエクト研究の文学への応用に関しては、我が国では未踏の領域であり、海外においてもまだ十分な研究の蓄積がないため、主として基本文献の渉猟と読解、並びに、アメリカン・ルネサンス文学作品における情動表現の全体的位置付けについて調査を続けた。

平成26年8月に夏季セミナーを開催し、国内のトップ級アメリカ文学研究者諸氏を招いて、アフエクト理論に関する研究会を実施した。その中でアフエクト理論を文学研究に応用する方策を議論し、メルヴィル、ホーソン、ジェームズ、ポー、エマソンらアメリカン・ルネサンス作家の作品やその背景となる思想を身体や情動の観点から再検討することができた。その中で、平成27年度に発行する図書の構想を明確化し、各自の論点を深めることとした。この間、ニューヨーク市立大学のデイヴィッド・レノルズ氏とはメールで連絡を取り合い、講師招聘を前提にアフエクト理論とアメリカン・ルネサンス研究の関連性について意見交換を行った。また、同じく、ニューヨーク市立大学のエリック・ロト氏とは現地で直接面談し、アメリカン・ルネサンス作家と19世紀アメリカの音楽文化の関わりについて意見を聴取した。スタンフォード大学のシアン・ンガイ氏とはメールで連絡を取り、上述の図書の中で、ンガイ氏の *Ugly Feelings* からメルヴィルの『信用詐欺師』に関する論考を訳出して掲載することの同意を得た。

平成 27 度も 8 月中旬にサマーセミナーを開催し関東、関西、九州より第一線で活躍されるアメリカ文学研究者を招いて研究報告や講演会を行った。その中でアフェクト理論の最新の知見について理解を深めるとともに、研究分担者だけではまかないきれなかったヘンリー・ジェイムズやハリエット・ビーチャー・ストウの情動表現や、トラウマ理論とアフェクト理論の接点等について討論を行って。さらに、3 月には日本ナサニエル・ホーソーン協会九州支部と共催によるシンポジウムを開催し、ホーソーンの語りにおける情動の働きや、アメリカ文学研究者が見落としがちな D・H・ロレンスの『アメリカ古典文学』におけるホーソーン解釈とそこにおける原始的な情動の位置付けについて、多くの研究者と議論を行った。

本研究の集大成として平成 28 年 3 月に『身体と情動—アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』を刊行した。本書は三部構成となっている。第一部は「解き放たれる身体」と題し、身体欠損への意識変容や医学的知識の浸透、電気の発見から派生した疑似科学の流行などを主要な文脈として、物体としての身体が突きつける謎めいた力に、精神至上主義の十九世紀アメリカがいかにして向き合ったのか、そして、作家たちはいかなる想像力によってそれを作品に表現したのかを探った。

第二部は「知覚とリズム」と題した。人間の言語にはそれが伝える意味内容とは異なるレベルで、言葉の響きやリズムが付帯し、それらが意識のコントロールを超えて情動を喚起する場合がある。言語の使い手である作家たちが、身体を通して知覚される音と律動の刺激を、言語表現との関係において、いかなる形で導き出したのかを考えている。

第三部は「情動の政治学」と題し、怒り、悲しみ、疑念、信頼、不安など、意識の管轄をすり抜けて湧き上がる様々な情動が、文学作品においてどのように変奏され、いかなるパターンを形成し、テキストがその中にどのような政治意識を織り込んでいるのかを考えるものである。

さらに、本書には「特別寄稿」として、スタンフォード大学教授のシアン・ンガイ教授に特段のご理解をいただき、アフェクト理論の文学への応用として先駆的研究である彼女の『醜い感情』から「トーン」の章を訳出して掲載している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 16 件)

(1) 大島由起子「ハーマン・メルヴィルの太平洋表象批評」『福岡大学人文論叢』46.4 (2016) 967-982 査読無し

(2) Mayumo Inoue “The Objects across the Pacific: Poetic Interruptions of Global Sovereignty in Charles Olson and Kiyota Masanobu” *Dicourse: Journal for Theoretical Studies in Media and Culture* Vol. 38, No.3 (2016) 査読有り

(3) 城戸光世「ホーソーン家の旧牧師館テキストにみる自然表象」『エコクリティシズム・レビュー』9 (2016) 査読有り

(4) 城戸光世「日本における〈アメリカン・ルネサンス〉ルネサンス」『中・四国アメリカ文学研究』52 (2016) 査読有り

(5) 高橋 勤「根をもつということ—ソローの文化論」『ヘンリー・ソロー研究論集』41号 (2015) 11-20 査読有り

(6) 古屋耕平「ビルドゥングと超越 エマソンとドイツ翻訳理論」『和洋女子大学紀要』55 (2015) 15-23. 査読無し

(7) 高野泰志「都市の欲望 ポーの推理小説に見られるのぞき見の視線」『九州英文学研究』31 (2015) 73-80. 査読有り

(8) 高野泰志「さらし台と個室の狭間で ナサニエル・ホーソーンのマタフィクションの試み」『アメリカ文学研究』51 (2015) 5-21. 査読有り

(9) 高野泰志「『夜はやさし』の欲望を読む」『英文学研究』92 (2015) 61 - 76 査読有り

(10) 大島由起子「ハーマン・メルヴィルの太平洋表象批評」『福岡大学人文論叢』46.4 (2015) 967-982. 査読無し

(11) 井上間従文「時間の押し花を拡散させること 仲宗根香織の写真における「過去/未来」のイメージ-イメージ論に向けて 1」『Las Barcas』3 (2014) 32-41. 査読無し

(12) 井上間従文「根間智子、暗い部屋からつながる特異なかたち イメージ論に向けて 2」『Las Barcas』3 (2014) 83-91. 査読無し

(13) Takahashi, Tsutomu. “Towards a Comparative Poetics: Sakutarō's Tsuki ni Hoeru and Stephen Crane's The Black Riders and Other Lines.” 『英語英文学論叢』64 (2014) 37-55. 査読無し

(14) 稲富百合子「『大理石の牧神』におけるホーソーンのアート論 「白い文明」と「黒い文明」の間で」Vol. 13 No.5 (2014) 1-7. 査読無し

(15) Yukiko OSHIMA. “Herman Melville’s ‘Pequot Trilogy’: The Pequot War in *Moby-Dick*, *Israel Potter*, and *Clarel*” *The Japanese Journal of American Studies*. 24 (2013) 47-65. 査読有り

(16) 古屋耕平「アメリカン・ルネッサンスと翻訳 メルヴィルの場合」『スカイ・ホーク』(日本メルヴィル学会) 1 (2013) 72-97. 査読有り

[学会発表](計 41件)

(1) 古屋耕平「ホーソン晩年の作品における歴史と情動」日本ホーソン協会九州支部第38回支部研究会シンポジウム「アメリカン・ルネッサンスにおける情動と身体」2016年3月26日(福岡大学、福岡県、福岡市)

(2) Kohei Furuya “Translation and Nation: American Literature in the Age of World Literature” Hankuk University of Foreign Studies, Department of English, The 2016 Special Lecture Series 2016年3月18日(Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, Korea)

(3) 高野泰志「神への祈りと罪の贖い---『武器よさらば』に見られる宗教意識」日本アメリカ文学会北海道支部 2015年12月19日(北海学園大学)

(4) Mayumo Inoue “Olson’s ‘Ruin’: A Genealogy of Race and Origin of Objects in the Pacific” Modernist Studies Association Annual Conference 2015.11.20 Westin Copley Place (Boston)

(5) Tsutomu Takahashi “The Poetics of the Wild: From Thoreau to Gary Snyder” International Symposium on Ecopoetics, Ekphrasis and Gary Snyder Studies November 12-15, 2015, Hunan University, China

(6) Mayumo Inoue “The University and the Inexhaustible Common” Underwood International College 10th Anniversary Symposium, “Liberal Arts in the Age of Globalization” 2015.10.28 延世大学校 Underwood International College (ソウル、韓国)

(7) 高野泰志 「Jake Barnes の欲望の視線---不倫小説として読む *The Sun Also Rises*」日本アメリカ文学会 2015年10月11日(京都大学、京都府、京都市)

(8) 城戸光世「ホーソン夫妻の旧牧師館テ

クストにみる自然表象」シンポジウム「ホーソンと自然」エコクリティシズム学会 2015年8月8日(広島市立大学、広島県、広島市)

(9) 古屋耕平「アメリカン・ルネッサンスと翻訳 ホーソンの場合」日本ホーソン協会東京支部研究会 2015年7月18日(専修大学、東京都)

(10) 城戸光世「アメリカン・ルネッサンスの未来形」日本ナサニエル・ホーソン協会九州支部 2015年7月5日(福岡大学、福岡県、福岡市)

(11) Kohei Furuya “Moby-Dick and the Ethics of Translation” The 2015 International Herman Melville Society Conference 2015年6月26日(慶應義塾大学、東京都)

(12) Yukiko Oshima “What Dead Letter Office?: Historicizing ‘Bartleby’ in Amerindian Context” The Tenth International Melville Conference Tokyo 2015年6月25日(慶應義塾大学、東京都)

(13) 城戸光世「日本における<アメリカ・ルネッサンス>ルネッサンス」シンポジウム「アメリカ文学史を語る 日本における受容と挑戦」中・四国アメリカ文学会 2015年6月14日(香川大学、香川県、高松市)

(14) Mayumo Inoue. “Critique of Friendship: On Global Sovereignty, its Nation-Forms, and People without Nation.” Japanese Association for American Studies The 48th Annual Conference(招待講演) 2014年06月08日-2014年06月08日(宜野湾市コンベンションセンター、沖縄県、宜野湾市).

(15) 城戸光世「世界をまたにかけるヘスターたち ボーダーレス時代の『緋文字』考」『シンポジウム「応答・再演行 為としての文学史 アダプテーションの中のホーソン」』日本ナサニエル・ホーソン協会九州支部 2015年03月28日-2015年03月28日(福岡大学、福岡県、福岡市)

(16) 竹内勝徳「『ファンシヨー』における鏡像と破壊 ポール・オースターを通して読むポストモダンなホーソン」日本ナサニエル・ホーソン協会九州支部シンポジウム 2015年03月28日-2015年03月28日(福岡大学、福岡市)

(17) Mayumo Inoue. “On Bright Humor: Cinematic Sensoriums of History in Recent East Asian Films” Association for Asian Studies Annual Conference (2015年03月

27日～2015年03月27日(Chicago, Sheraton Chicago Hotel & Towers)。

(18) Takahashi, Tsutomu. "Beyond Duality: Thoreau's Redefinition of Self-Culture." International Symposium on Literature and Environment in East Asia 2014年11月22日～2014年11月22日(Meio University, 沖縄県、名護市)

(19) 竹内勝徳「アメリカン・ルネサンスにおける身体と機械 アフォーダンス表象を中心に」日本英文学会九州支部第67回大会(招待講演) 2014年10月26日-2014年10月26日(福岡女子大学、福岡県、福岡市)

(20) 高橋 勤「根をもつということーソローの文化論」日本ソロー学会 2014年10月03日-2014年10月03日(北星学園大学、北海道札幌市)

(21) 大島由起子「バトルビー」に潜む北米先住民 第3回日本メルヴィル学会 2014年09月14日～2014年09月14日(専修大学、東京都)。

(22) Yasushi Takano. "Creation and Rape: Sexual Exploitation of a Girl in a Defeated Nation in Across the River and into the Trees" The 16th Biennial International Hemingway Society Conference in Venice 2014年06月25日-2014年06月25日(Isola di San Servolo Venezia, Italia)

(23) Kohei Furuya. "Translating Children's Words: Hawthorne, Melville, and the Question of Language Education" The 2014 Nathaniel Hawthorne Society Meeting 2014年06月13日-2014年06月13日(The Massachusetts College of Liberal Arts, 米国ノースアダムス)

(24) 城戸光世(司会・発表)「ホーソンとトランスアトランティック・ランドスケープ」『シンポジウム<旅する19世紀アメリカ作家たち 自然・風景・いきもの>』日本ナサニエル・ホーソン協会第33回大会 2014年05月23日-2014年05月23日(かでの2・7北海道立道民活動センター、北海道札幌市)

(25) 古屋耕平「翻訳不可能性について メルヴィルの自然、風景、いきもの」日本ナサニエル・ホーソン協会、第33回全国大会シンポジウム「旅する19世紀アメリカ作家たち 自然、風景、いきもの」2014年05月23日～2014年05月23日(かでの2・7北海道立道民活動センター、北海道、札幌市)

(26) 古屋耕平「アメリカン・ルネサンスと翻訳コミュニティの形成」日本アメリカ文

学会、中部支部第31回支部大会シンポジウム「知のコミュニティの形成 アメリカン・ルネサンスを中心に」2014年04月20日-2014年04月20日(中京大学、愛知県、名古屋市)

(27) 高野泰志「『緋文字』と小説の勃興」日本ナサニエル・ホーソン協会九州支部 2013年12月01日(福岡大学、福岡県、福岡市)

(28) 高野泰志「密室に注がれた視線 19世紀アメリカ文学の都市とポーの推理小説」九州英文学会(招待講演) 2013年10月27日(鹿児島国際大学、鹿児島県、鹿児島市)

(29) 大島由起子「シンポジウム「フォークナーとメルヴィル」: 「熊」(1942)の読者の安全圏」日本ウィリアム・フォークナー協会第16回全国大会 2013年10月11日(立教大学、東京都)

(30) 稲富百合子「*The Marble Faun*におけるホーソンの芸術論 大理石の彫刻に隠された「色」をめぐる」日本ナサニエル・ホーソン協会九州支部 2013年09月28日(北九州市立大学、福岡県北九州市)

(31) 大島由起子「<シンポジウム>「メルヴィルと環境」: 「『ピエール』の古層 ジョセフ・プラントとモーリー・プラント」第26回エコクリティシズム研究学会 2013年08月10日(広島修道大学、広島県、広島市)

(32) 稲富百合子「イタリアにおけるホーソンの風景論」エコクリティシズム研究学会 2013年08月10日(広島修道大、広島県、広島市学)

(33) Mayumo Inoue. "Interrupting the Postcolonial/Neoliberal Governmentality: the Events of Light in Secret Sunshine." *Inter-Asia Cultural Studies* 2013 2013年07月03日(National University of Singapore, Singapore).

(34) Mayumo Inoue. "On Bare 'Objects': Kiyota Masanosbu's Poetics of 'Stones' in US-Occupied Okinawa." *Except Asia: Agamben's Work in Transcultural Perspective* 2013年06月25日(National Taiwan Normal University, Taipei City, Taiwan).

(35) 城戸光世(シンポジウム司会)「カウンターナラティブから読むアメリカ文学」中・四国アメリカ文学会第42回大会 2013年06月09日(松山大学、愛媛県、松山市)

(36) 古屋耕平 "Becoming-Foreigner: Melville, Deleuze, and the Stuttering of

American Literature” The First International Deleuze Studies in Asia Conference 2013年06月01日(淡江大学、台湾)

(37) 稲富百合子「ワークショップ:「天国行き鉄道」を読む」日本ナサニエル・ホーソン協会第23回全国大会 2013年05月24日(仙台国際センター、宮城県、仙台市)

(38) 竹内 勝徳「アフェクト研究からみたアメリカン・ルネサンスーハーマン・メルヴィルを中心に」九州アメリカ文学会第59回大会 2013年05月12日(県立長崎シーボルト大学、長崎県、西彼杵郡長与町)

(39) 大島由起子「イシュメールのその後 測量と刺青と」九州アメリカ文学会第59回大会 2013年05月12日(長崎県立シーボルト大学、長崎県、西彼杵郡長与町)

(40) 高橋 勤「事故と座礁の物語 アメリカン・ルネッサンス文学における悲劇性」九州アメリカ文学会第59回大会 2013年05月11日(県立長崎シーボルト大学、長崎県、西彼杵郡長与町)

(41) Mayumo Inoue. "Theresa Hak Kyung Cha's Hauntology." *Supernatural Asia Exploring the Natural and Supernatural in Asian Cinema* 2013年04月27日(城西国際大学、千葉県、東金市).

〔図書〕(計 11件)

(1) 城戸光世『ホーソンの文学的遺産』開文社(2016)193-213.

(2) 竹内勝徳・高橋勤『身体と情動 アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』(彩流社、2016)1-327.

(3) 高橋 勤(共編著)『ジョン・ブラウンの屍を越えてー南北戦争とその時代』(金星堂、2016)1-356.

(4) 高野泰志『アーネスト・ヘミングウェイ、神との対話』(松籟社、2015)1-262

(5) 大島由起子「たかが名前、されど『白鯨』の不在の中心としてのピーコッド族」千石英世編『シリーズ もっと知りたい名作の世界 11 『白鯨』』(ミネルヴァ書房、2014)108-119.

(6) Katsunori Takeuchi. "Vocal Sounds and Linguistic Signification in Herman Melville's Novels" (University of Rome Press, 2014). 25-40.

(7) TAKAHASHI, Tsutomu. "Minamata and the Symbolic Discourse of the South" *Ecoambiguity, Community, and Development*. (Lexington Books, 2014) 59-69.

(8) 城戸光世(共訳)『ピーボディ姉妹 アメリカン・ルネサンスに火をつけた三人の女性たち』(南雲堂、2014)1-540.

(9) 城戸光世「楽園の光と影 ソフィア・ピーボディの『キューバ日記』を読む」『越境する女 19世紀アメリカ女性作家の挑戦』(開文社、2014)115-140.

(10) 高橋 勤「ソローとダニエル・ウェブスター 『コッド岬』のサブテキスト」『アメリカン・ルネッサンス 批評の新生』(開文社、2013)61-81.

(11) 高野泰志編『ヘミングウェイと老い』(松籟社、2013)1-335.

6. 研究組織

(1)研究代表者

竹内勝徳(TAKEUCHI KATSUNORI)

鹿児島大学・法文教育学域・法文学系・教授
研究者番号: 40253918

(2)研究分担者

高橋勤(TAKAHASHI TSUTOMU)

九州大学・言語文化研究院・教授
研究者番号: 10216731

大島由起子(OSHIMA YUKIKO)

福岡大学・人文学部・教授
研究者番号: 40168919

稲富百合子(INADOMI YURIKO)

福岡大学・言語教育研究センター・外国語講師
研究者番号: 50526514

高野泰志(TAKANO YASUSHI)

九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号: 50347192

城戸光世(KIDO MITSUYO)

広島大学・総合科学研究科・准教授
研究者番号: 10351991

井上間従文(INOUE MAYUMO)

一橋大学・言語研究科・准教授
研究者番号: 50511630

古屋 耕平(FURUYA KOHEI)

和洋女子大学・その他部局等・助教
研究者番号: 70614882